

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「個別の支援を必要とする子どもの引継ぎ」

進級、就学、進学等の移行期は、子どもや保護者にとって大きな不安が伴います。うまくいった支援を次の人に見える形で伝えていくことで、新しい環境下でもこれまで育んできた力を発揮することができます。切れ目ない「のりしろ」のある引継ぎを目指しましょう。

1 引継ぎのポイント



(1) 情報の提供・収集 ※「特別支援教育年間計画」に引継ぎに係る計画を明記する

- ・口頭による引継ぎだけではなく、個別の教育支援計画、個別の指導計画、就学支援シート、指導要録、教材・教具、学習の記録、キャリアノート等のツールを活用する。
- ・スタートがうまくできると、その後の生活がスムーズになるので、入学直後に、特に配慮することを中心に情報収集を行う。
- ・各地区ごとに実施している学校間の情報交換会の他に、積極的に前在籍校（園）を訪問して、直接子どもの様子を観察して実態把握に努める。

(2) 情報の整理・共有

- ・特別支援教育コーディネーターが中心になり、得た情報を一覧に整理し、全職員が共通理解するための基礎資料を作成したり、保管場所を確認したりする。
- ・整理した情報を、いつ・どこで・誰が・どのように確認するのか、流れを具体的に提示する。
- ・進級する子どもについては、実態を一番知っている現担任が年度末に個別の教育支援計画や個別の指導計画（仮案）を作成して引き継ぐ。

(3) 情報の活用 ※「特別支援教育年間計画」に各種計画の締切日や保護者面談日を明記する

- ・入学後、引き継いだ情報を基に、校内委員会や学年会で子どもの実態や支援内容を確認・検討する。
- ・引き継いだ情報と仮案、新学期がスタートしてからの子どもの様子を基に、関係する職員で検討し、個別の教育支援計画と個別の指導計画を完成させ、保護者面談で目標や支援内容・方法を共有し、修正を加える。
- ・前籍校（園）に入学後の様子を伝えることで、引き継いだ情報の活用状況が分かり、次年度以降も安心して情報の引継ぎができるようになる。



2 各移行期における引継ぎのポイント

(1) 4歳児クラス⇄5歳児クラス

- ・5歳児健診（親子相談）で発達のアンバランスや遅れ、言葉の遅れや発音を指摘された子どもについては、園が単独で動くよりも、福祉課や教育委員会と連携し、保護者に医療・療育機関の利用を勧める。
- ・就学に悩みを抱えている保護者については、県主催の相談会や教育委員会の就学相談を勧め、9月下旬までに就学先を決められるようにサポートする。

(2) 園⇄小学校

- ・時間、場所、活動、人等、全てが大きく変わるため、日ごろの園での様子に加えて、入学後の子どもの予想される具体的な姿を伝える。

- ・子どもの苦手なことだけでなく、園で行った有効な支援（合理的配慮も含む）を伝える。
- ・保護者の悩みや心配事を丁寧に聞き取り、小学校に引き継ぐとともに、必要に応じて再度教育相談や学校見学を計画する。
- ・特別支援学級入級を希望している保護者については、入学説明会で入学式の参加の仕方、通常の学級との交流及び共同学習の時間等を小学校から保護者に連絡をする。（以前、名札はみんなと同じにしてほしい、入学式ではみんなと同じ列にしてほしいなどを要望した保護者がいた）

（３）小学校⇔中学校 ※個別の教育支援計画等は作成ではなく、活用することが目的である

- ・特別支援学級に在籍する子ども、通常の学級で支援員対象の子どもについては、保護者の同意を得て、個別の教育支援計画及び個別の指導計画を活用し、本人の現在の姿、保護者の願い、有効だった支援等を引き継ぐ。
- ・教科担任制となるため、有効だった支援が継続できるように、中学校では早い段階に校内・学年部で子どもの目標や支援内容・方法を共通理解する機会を設定する。新設の難聴学級設置校は、4月中に職員対象の校内研修会を実施している。
- ・支援は周りの気付きと本人の自覚が始まりである。必要な支援について子どもと話し合う機会を通して自己理解を促しながら、個別の教育支援計画や個別の指導計画に参画できるようにする。

（４）中学校⇔高等学校

- ・受検に際して合理的配慮（試験時間の延長、別室受検、リスニングの配慮等）が必要な場合は、中学校から志望校に「特別配慮申請書」を提出する。
- ・合格発表から入学までの短期間で引継ぎを行うことになるため、事前に本人及び保護者の同意を得て、個別の教育支援計画等を活用して確実に情報提供を行う。
- ・合格後に開催される生徒指導主事や養護教諭の連絡協議会等で、個別の支援が必要な子どもの情報や保護者の教育的ニーズを伝え、高1クライシスを軽減する。



1年生は最初で最大の支援ができるチャンスです。しかし、支援する人は変わるので同じ質を保ちながら、より成果を上げるためには、関係機関が連携して確実に情報を伝え合うことが大切です。

支援の成果は、支援を必要とする子どもの思い×支援をする人の思いです。どちらかが小さかったり、ゼロだったりすると成果は見えません。特別支援教育コーディネーターが中心となり、本人・保護者・関係者の思いの形が重なり合うように、1年生を一人ではなく、チームで一貫性のある支援できる校内支援体制を構築してください。



とれたて直送便



「もしもタイムマシンで行くとしたら、過去？それとも未来？」

中学校の特別支援学級に在籍するAさんと面接練習をした際、上記のような意地悪な質問をした。少し考えた後、「私は過去に戻って、失敗したことをやり直したいです」と話していた。臨機応変に答えた姿に、思わず「合格です！」と伝えた。

過去の失敗は変えることはできないが、過去の失敗に対する解釈は変えることができる。解釈次第でいくらでも自由にプラスにできる。未来は自分で創っていくことができるから、過去ではなく未来に向かって進んでいけばいい。

Aさんには、「今の自分は何年後かの未来の自分が、人生をもう一度やり直したいと思ってタイムマシンに乗ってやってきた自分なんだよ！」と伝えたい。

